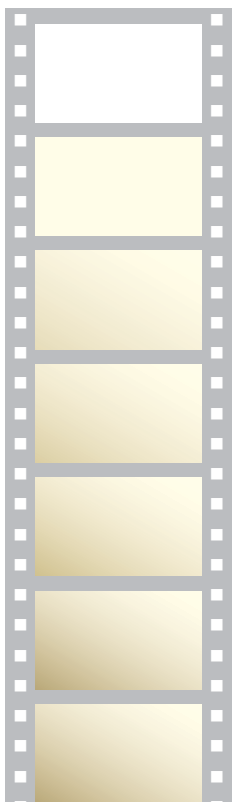


伸<sup>ノブ</sup>さんのシネマトーク

鈴木 伸夫





## 第十七回 「水に流せない映画の話」

父が北海道小樽市からおよそ千五百キロ離れた愛知県南東部の豊橋市へ転勤になったのはなぜか？本人に聞いてもわからないでしょう。

とにかく、昭和29年4月、M製菓豊橋出張所長として勤務することになったのです。総二階建ての一階は事務所と倉庫、二階は、所長家族（つまり、ぼくたち家族）の住宅でした。

驚いたのはその当時（昭和29年）その住宅には下水道が完備して、トイレが水洗トイレだったのです。子ども心にもこれにはビックリしました。

ところで「おせんにキャラメル！」（おせんべいにキャラメルはいかがですか？）と映画の休憩時間に客席まで売りに来た時代（昭和30年代よりも前の時代でしょうか？ぼくの時代にはなかった。売店があつたから…。）

菓子メーカーのM製菓は対抗するm製菓とともに、宣伝合戦に力を入れ自社の製品を買ってもらおうと必死でした。

父のM製菓は、夏休みになると、大型バスを改造した宣伝カーを全国各地に走らせ、夜には公園に仮設のスクリーンを張り、16ミリフィルムで無料の映画上映会を実施しました。作品は「鞍馬天狗」や「銭形平次捕物控」「また旅物」「猛獣狩り」「漫画映画」などでした。夜、雨になると中止のため、晴れの天気になるように、お祈りをしたものです。

どうしてこんなに宣伝に力を入れたのかと考えると、もちろん売り上げのこともありますが、会社のイメージも大切にしたのではないのでしょうか？ぼくが推理すると、藤本眞澄フジモトサネズミという日本映画の黄金時代に名作やヒット作を製作したプロデューサーがかかわっているのではないかと思うのです。実は、藤本プロデューサーは大学卒業後、M製菓で宣伝の仕事をしていたのです。その後、東宝の前身、PCLに入社、プロデューサーになり、東宝退社後、「藤本プロダクション」を設立して活躍。「青い山脈」(49年製作)「社長シリーズ」「若大将シリーズ」などを製作したのです。M製菓と東宝とのタイアップのパイプ役は藤本PDだったというのは、あくまでぼくの推測にすぎません。しかし、テレビのCMの原型がすでに映画の中でタイアップ

プとして行われていたことは、驚きでした。

父は豊橋出張所で5年半勤務のあと、名古屋支店へ転勤となり、家族も再び一緒に移動したのです。場所は大都市に変わってもM製菓と東宝の縁は切れず、名古屋では野外上映会から劇場での試写会開催となり、ぼくは「東京オリンピック」(65年製作)や「赤ひげ」(65年製作)を封切日より前に観ることができたのです。

(続)

伸

平成23年4月